

第4章 群馬県大泉町における多文化共生施策と大泉町観光協会 多文化共生の担い手について考える

1 はじめに

群馬県大泉町は外国人集住都市として知られている。2017年9月には外国人住民の割合が町民人口の18パーセントを超え、地方紙でも大きく取り上げられた¹。とはいえ、それは全く新しい現象ではない。大泉町で外国人住民が急増したのは、1990年以降であり、2008年には16パーセントを超えた。国籍別にみると、当時からブラジル人住民が多数を占めた。こうしたことから、ここ10年間、同町では、ブラジル人住民の存在を資本として観光地化を目指し、「ブラジルタウン」という呼称を前面に押し出したブランド化が進められた²。こうした「ブラジルタウン」のブランド化については第4節で詳しく説明するが、簡単に言えば同町で生活するブラジル人住民が運営するブラジル料理のレストランや食材店、あるいはスポーツ施設などを観光地として全国に発信していく活動を指す。

ところで、この活動は大泉町観光協会が中心となって進めてきた。大泉町観光協会は、2007年に発足し、現在も活動を続けている。ただし、同協会がいわゆる多文化共生の担い手として評価されることは少なかった。同協会が推進する観光地のPRなどは、地域の経済振興を目的とする側面があるからである。同協会はあくまで観光促進を目的に作られてきた団体と見られてきた。

これまで多文化共生というと、外国人住民を地域社会の一員として受け入れていくという理念のもと、コミュニケーションのための通訳や生活相談、日本語の習得などを目的とする、いわゆる支援活動が推奨されてきた。そのなかで、多文化共生の担い手も、多文化共生施策を推進する地方自治体、あるいはボランティア活動を行う民間団体や民族学校など支援団体が想定されてきた。こうした文脈を考えれば、大泉町観光協会は、いわゆる多文化共生の担い手からはやや異なっているように見えたであろう。

しかしながら、大泉町観光協会の活動を精査していくと、その活動は外国人住民が地域住民として活躍することを促進するものであることがわかってきた。そこで、本稿では大泉町観光協会の活動について検討し、同協会が大泉町における多文化共生の担い手のひとつとなっていることを明らかにしたい。

また、本稿では大泉町における多文化共生に対する取り組みの変化についても指摘する。これまで大泉町における多文化共生では、ブラジル人住民を中心に論じられてきた。しかし、近年多国籍化が進み、大泉町役場も、大泉町観光協会も新たな対応を模索している。本

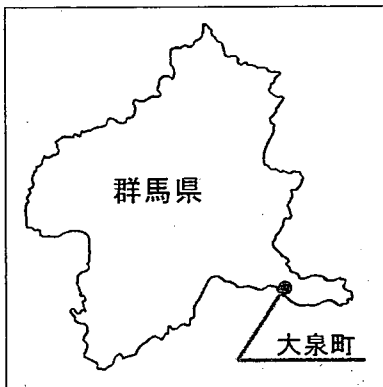
稿はそうした大泉町における変化と新たな対応についても言及する。

2 群馬県大泉町と外国人

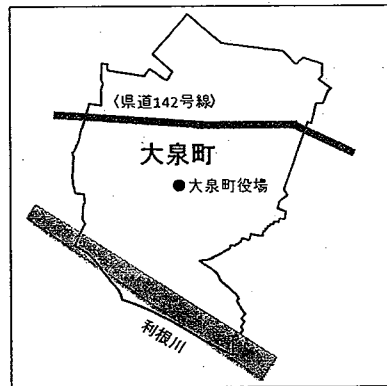
本章では大泉町と外国人住民の概況について確認する。

群馬県大泉町は県南部に位置する小都市である。北と西に太田市、東は邑楽郡邑楽町、そして南に利根川をはさんで埼玉県熊谷市に隣接する。人口は約4万人で、隣接する市町村のなかでも規模が小さい。一方で、町内には、国産家電メーカーや国産自動車メーカー、冷凍食品メーカーなどの工場が立地する県内有数の工業都市でもある。

図表1 群馬県における大泉町の位置



図表2 大泉町概略図



草山作図

また、同町は外国人比率が高いことで全国的に有名である。2017年9月には速報として、町内の外国人住民の登録者数が人口の18パーセントを超えたことが地元新聞などで報道された³。こうした大泉町における外国人住民の増加は、1989年の出入国管理および難民認定法の改正にさかのぼる。このとき、在留資格に「定住者」が加わり、大泉町でもその対象となった日系ブラジル人や日系ペルー人が急増した。当初はその多くが出稼ぎで、大泉町の工場などに勤務し、生活し始めた。

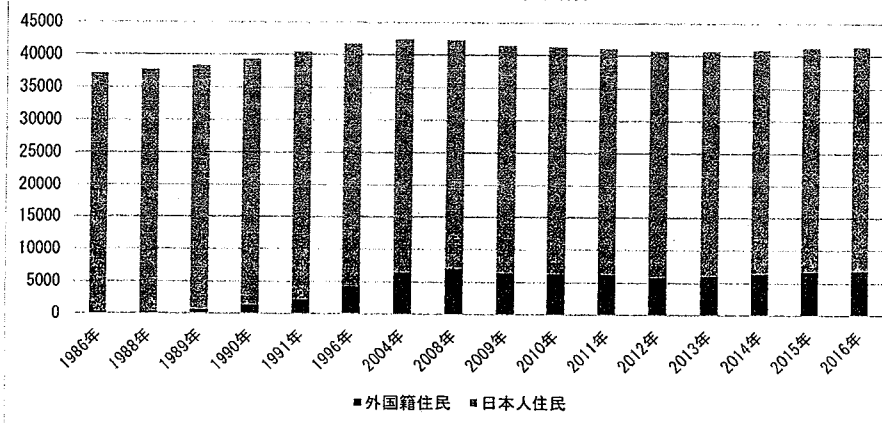
図表3は、大泉町における外国人住民数の増減を示している（なお、図表3、4で示される外国人数は外国籍住民数である）。

図表3からは、1990年以降外国人が急激に増加していることがわかる。1989年時点で、同町の外国人住民は623人であった。ところが、1990年にはその倍の1,315人となる。さらに翌年には2,166人まで増加し、5年後の1996年には4,000人を突破する。このとき外

国人住民は、町民の約10パーセンを占めるまでになっていた。その後も外国人住民の増加は続き、2008年には7,082人となった。

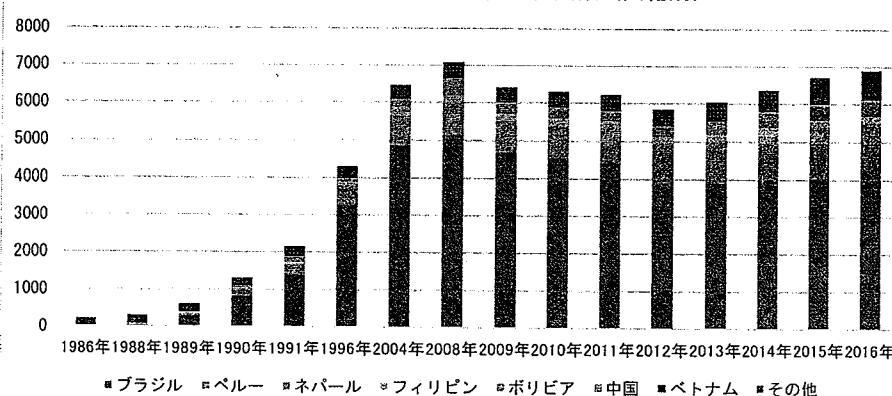
しかし、2009年以降は7,000人を割り、2012年は5,859人と、2000年代初期の状態まで戻ってしまった。これはリーマンショックと東日本大震災の影響によるところが大きい。2008年のリーマンショックによる不況の影響によって職を失ったことや、地震の揺れや原発に関する風評に恐怖心を掻き立てられたことなどから、帰国が相次いだからである。こうした状況が落ち着き、2013年以降は外国人住民が再び増加する傾向にある。2017年、同町の外国人住民は再び7,000人を突破した。

図表3 大泉町の住民数



大泉町観光協会提供資料に基づいて作成

図表4 大泉町における外国人住民数（国籍別）



同上の資料に基づいて作成

こうした外国人住民のうち、大きな割合を占めるのはブラジル人住民である。2008年までは大泉町の外国人住民の7割がブラジル国籍であった。これに対して、その他の外国人住民は比較的少数であった⁴。

このため、大泉町にはブラジル人住民のための衣食住に関するインフラストラクチャーが整っている。大泉町には、役場だけでなく、一般店舗でも日本語とポルトガル語の二言語で対応する場所が多い⁵。

たとえば、ブラジル人住民の求職については、ブラジル人が経営する人材派遣・業務請負会社が対応している。ブラジル人の経営する人材派遣・業務請負会社は、日本人雇用主との契約はもちろんだが、職場までの送迎バスの運行や住宅の斡旋なども業務として行っている。これによって、ブラジル人住民はたとえ日本語が十分に理解できなくても、職に就き、生活をはじめることができる。

それだけでなく、町内にはブラジル人が経営する商店やレストラン、あるいはスーパーマーケットが数多く開店している。接客はもちろんポルトガル語だが、メニューや商品などもポルトガル語表記となっている。ブラジル人住民はここで気兼ねなく故郷の味や食材、あるいは衣料などを手に入れることができるようになっている。

さらに、情報・教育分野に関する企業も多数ある。大泉町には、ポルトガル語でフリーペーパーなどの情報誌を出版する企業が店舗などを構えている⁶。しかも情報誌はレストランやスーパーマーケットなどに配布されており、手軽に手に取ることができる。また、教育分野では、ブラジル人学校⁷と呼ばれるブラジル教育省の認可を受けたポルトガル語による教育機関がある。大泉町周辺には、ブラジル人学校が4校存在する。これによって、ブラジル人住民はポルトガル語で情報を得たり、子どもにブラジルの教育を受けさせたりすることができるのである。

しかしながら、2008年以降、ブラジル人住民が外国人住民全体に占める割合は低下する傾向にある。2016年にはブラジル人住民の割合は6割程度までになり、代わってネパールやベトナム、そしてその他の外国籍を持つ住民が増加している。

つまり、大泉町では、2000年代にはブラジル人住民が圧倒的多数を占めたが、現在では多国籍化が進んでいる状況にある。

3 大泉町における多文化共生施策

大泉町は1990年代から外国人の受け入れに積極的であった。そのため、同町は国による多文化共生政策の推進以前から、外国人住民を支援する施策を行ってきた⁸。そして、現在

は「正しい情報を正しく伝え、正しく理解してもらおう」という理念の下、多文化共生施策に取り組んでいる。以下では、現在大泉町が取り組む多文化共生施策について確認する。

(1) 「正しい情報」を伝える

大泉町は、日本のルールを守り、日本の習慣を身につけてもらうことが外国人住民にとっても安全で快適な生活につながると考えている。そのため、ゴミ出しのマナーや納税への理解、子供の教育や日本語習得の必要性をポルトガル語による広報紙を発行・配布したり、説明会を開催したりするなど、様々な「伝える」取り組みを進めてきた⁹。

先にも示したとおり、町内の一般店舗ではポルトガル語での表記がなされ、フリーペーパーなどの情報誌も多数流通している。こうした対応は行政でも取り組まれており、大泉町役場では、ポルトガル語やスペイン語のできる通訳職員を窓口配置し、住民登録や福祉保健の手続きを中心に対応している。また、職員の手作りにより編集発行した二か国語の行政情報紙や、町の広報誌から記事を抜粋したポルトガル語版の広報誌を発行し、公共機関の窓口や小中学校の外国籍児童生徒に配布している¹⁰。その内容は保健センターでの予防接種や健診事業といった町の情報紙からの抜粋に加え、外国人に知らせたい事柄が掲載されている。この他、年に数回の特集号が発行され、日本の文化や習慣、各種制度や交通ルールなどを紹介している。

こうした多言語に対応するための取り組みである通訳は教育の現場にも配置されている。1990年10月には全国に先駆け、小学校で日本語学級を設置した。これは担当教員に加え、ポルトガル語などで指導する日本語指導助手が、個々の日本語習得状況に合わせた指導をおこなうというものである。

また、2007年4月には日本で生活するために必要な情報を発信する拠点として「多文化共生コミュニティセンター」を設置した。多文化共生コミュニティセンターには通訳を配置し、納税や保険といった行政制度の説明や、子供の教育相談をおこなっているほか、群馬県と共同制作したDVDによる日本での生活についての情報提供をおこなっている。

(2) 日本の習慣やマナーを知ってもらう

大泉町は年に数回「多文化共生懇談会」を開催している。この懇談会は日本で住むために必要な制度や地域情報を外国人住民に伝えるとともに、彼らから疑問に思うことや町づくりへの提案を聞くという、相互理解を深める試みによるものである。これは地域の役員・外国人住民・行政担当者の三者が互いに顔の見える関係を築くことを目的とした「三者懇

談会」が土台となっており、「三者懇談会」への外国人住民の参加が芳しくなく、外国人住民に地域コミュニティの一員としての意識をどのようにもってもらおうかという課題に対する取り組みであった。

近年、「多文化共生懇談会」ではブラジル人向けのスーパーマーケットを利用しての実施や、ブラジル人学校に通う子供を対象にした防災教室や交通安全教室といった「出張型」での取り組みをおこなっている。そのなかには子供の教育に関する進路指導もおこなわれている。「外国籍生徒進路説明会」では、外国人の保護者に対して日本での進学にかかる費用も示されるなど、より基本的な情報が提供されている。この成果として高校や大学に進学する外国籍の子供が増えているとされる。

これらの事業に加え、大泉町が近年取り組んでいるのが、外国人住民による外国人住民のための支援体制づくりである。2007年より開始された「文化の通訳登録事業」は、日本語が十分でなくてもできることは協力してやってもらうという考えのもと、母国語などで理解した情報を身近な外国人住民に母国語で広める取り組みである。これは、「文化の通訳」登録者が取得した大泉町からの情報を、家族や同僚、友人に正しく伝える役目を担ってもらうことを期待したものである。

さらに最近では同事業を発展させ、外国人住民が有事の際に支援者として活動できる体制づくりがはじめられている。大泉町では外国人ボランティア団体を育成するとともに、キーパーソンとなる外国人住民を探し、防災に関する情報提供や、防災訓練への参加につなげている。とくにボランティア活動の参加を促すため、大泉町では外国人住民に向けて、「地域の住民」として町行事やボランティア活動への参加を呼びかけている。ボランティアは有事に限らず河川の清掃など環境美化に関する活動もおこなっている。これらの活動は外国人住民と日本人住民が互いに顔を合わせる機会をつくっている。大泉町としてはこれにより住民の自立した多文化共生をおこなおうとしていると考えられる。

(3) キーパーソンの機能

大泉町の多文化共生のこうした取り組みを見ると、町は各施設に通訳を配置し、町の行政制度や日本文化を多言語化して発信してきたことがわかる。しかし、行政施設からの発信だけでは不十分であることがわかり、「多文化共生懇談会」をはじめとする「出張型」の文化発信を試みる。こうした互いに顔の見える関係を築く試みは一定の成果を上げたと思われるが、その反面、通訳がいなくてはコミュニケーションをとることができない外国人住民の割合も増加した。ここには母国語が未成熟なまま日本で暮らすようになったため、

日本語と母国語のどちらの言語能力も不十分である「ダブルリミテッド」の若者の増加現象もみられる。母国語でわかりやすく伝えようとしても、母国語の理解能力が高くないため行政の説明を理解できないという新たな課題が生じることとなる。

こうした課題へのアプローチと考えられるものがキーパーソンの存在だろう。先に示した「文化の通訳登録事業」は、日本語が十分でなくても外国人住民同士でできることは協力してやってもらうという取り組みである。外国人住民にとって「文化の通訳」は、日本文化やマナー・ルールに触れる貴重な機会であるが、その講師を務めるのは大泉町が声をかけた日本人住民である。つまり、制度やマナーをはじめに外国人住民に伝えるのは日本人住民である。これらの施策の目的は、日本人住民と外国人住民をつなぐ「橋渡し役」を作り出すことであろう。大泉町の施策として外国人の文化と日本文化（日本の生活）を結び、文化もしくは生活の通訳者（橋渡し役）を作り出すことを目的として取り組んでいることがわかる。言い換えれば、大泉町は、通訳をキーパーソンとして自立したコミュニティを作り上げることを試みているのである。

4 大泉町観光協会とその活動

以上のように、大泉町における多文化共生施策は、支援型からキーパーソンを通じた自立型の施策へと転換しつつある。このような外国人住民の主体的活動を促進とするような流れは、2000年前後から始まっていたとみられる。2000年頃からブラジル人住民のなかで、ブラジル人学校や NPO 法人などが設立され、徐々にコミュニティが形成されていった。そのなかで、一方的な支援から、外国人住民が主体的に活動する場が生れていったのである。

大泉町観光協会は、外国人住民とともに彼らが主体的に活動する場を作ってきた重要な団体のひとつである。同協会はその名の通り観光事業を推進する団体で、日本人住民が中心となって立ち上げられ、外国人住民と協働してさまざまな活動に従事してきた。本節では、まず大泉町観光協会の組織と活動について確認していく。

なお、本節で取り上げた内容は、大泉町観光協会事務局からの提供資料と同協会に対するインタビュー、そして同協会主催の各種イベントでの調査に基づいている。

(1) 沿革

大泉町観光協会は2007年に設立された。名称にあるとおり、大泉町における観光振興を目的としている。その所在地は、大泉町役場の向かいにある大泉町商工会内一角である。大泉町商工会は、同町の商店や工場などの経営者によって運営されている。

大泉町観光協会の活動は以下のようにしてはじまった。

大泉町は周辺地域と比較して面積約 18 平方キロメートルと小さく、特別な自然環境はない。そのうえ、町の歴史も浅く、歴史的建造物なども少ない。したがって、いわゆる観光資源には乏しいと考えられてきた。

そうしたなかで、ブラジル人住民の増加が大泉町に大きな特徴を与えることになった。1990 年代を通じてブラジル人住民を対象とするスーパーマーケットやレストランなどの施設が町の中心商店街で開店し、その景観が中華街などに通じるエスニックタウン的様相を伴うようになったのである。

こうした状況を踏まえ、ブラジル人住民を対象とする施設をまとめて「ブラジルタウン」と呼び、それを観光地としてプロモーション活動を行う団体として、大泉町観光協会が設立された。設立の母体となったのは、大泉町商工会である。設立時には、同会に所属する日本人住民が中心となって資金を出し合ったとされる。つまり、大泉町観光協会は民間団体として出発した。

以下で詳しく述べるが、その活動は、ブラジル文化に関するイベント興行、観光マップの作製、観光ツアーの運営及び調整、サンバダンサーの派遣、土産品の開発・販売・プロモーション、ブラジルレストランへの集客提案など、多岐にわたっている。

(2) 組織

大泉町観光協会は、会長 1 名、副会長若干名が置かれる。そのもとで、総務、事業部会、事務局が設けられている。事業部会は郷土・文化部会、広報部会、商品開発部会に分けられている。郷土・文化部会は、町内伝統行事の発信や提案などを行っている。広報部会はホームページ作成や観光マップなどの作製提案などに携わる。商品開発・販売部会は、土産品などの開発などを提案する。総務は、こうした部会の意見などを調整する。

これに対して、事務局は事業を遂行する立場にある。総務で調整された計画が承認されると、事務局が具体案を策定し、実行する。「ブラジルタウン」に関するイベント運営、観光マップやホームページ作成、ツアー引率、土産品のプロモーションなどは、事務局が調整・運営している。なお、現在、事務局には事務長 1 名、事務員 2 名が配置されている。

ただし、大泉カルナバルなど町内全体で行われるイベントでは、事務局が中心となって町役場と観光協会役員で実行員会を立ち上げ、開催計画を立てる。また、参加者が数万人規模のイベントなるので開催時には各部会からの増員もある。

また、同協会は基本的には日本人住民が中心となって立ち上げられた組織だが、外国人

住民も精力的に運営に携わっている。

(3) 資金

大泉町観光協会は当初、大泉町商工会の会員を中心に自己資金で始められた。やがて大泉町から補助金を得るようになり、現在は補助金と事業収益で運営されている。補助金については、大泉町の観光振興に関する予算から補助を受けている。ちなみに、2017年度の補助額は運営費の三分の二近くを占めた。また、事業収益については、イベント出店料からの利益のほか、会員年会費、町内ツアーガイド料などがある。

(4) 大泉町観光協会の活動—「ブラジルタウン」のブランド化

以上のような体制で、大泉町観光協会は、「ブラジルタウン」を目玉とした観光事業を推進している。

大泉町観光協会が最初に取り組んだのは、「大泉カルナバル」と呼ばれるイベントの開催である。同協会は、2007年、「大泉カルナバル」を計画し、「ブラジルタウン」のシンボルとして発信しはじめた。大泉カルナバルは、ポルトガル語の「carnaval」を日本語で表記して、「カルナバル」と名付けられているように、ブラジルのカーニバルを意識して計画された。そして、大泉カルナバルは、2017年まで毎年開催されてきた。2015年までは大泉町役場の北側に位置する三洋野球場（現 PANASONIC 野球場）で開催された。第2回までが屋内で、第3回からは野外ステージでサンバコンテストが開催された。「野外でサンバコンテスト」という点で、大泉カルナバルはブラジルのカーニバルに近づけられていった¹⁾。このなかで、大泉カルナバルは年を追うごとに知名度を高めていった。図表5に示しているように、第1回には、来場者は5,000人であったが、第6回には35,000人と7倍にも膨れ上がっている。

図表5 大泉カルナバルの概要と来場者数

	日程	時間	会場	天気	演目	来場数
第1回 2007年	9月30日(土)	11:00~17:00	三洋体育館	雨	サンバ他	5,000人
第2回 2008年	8月30日(土) 31日(日)	12:00~20:00 10:00~17:30	町民体育館	晴れ	サンバ他、移民100周年事業	8,000人
第3回 2009年	9月19日(土)	11:00~20:00	三洋野球場	小雨 あり	サンバコンテスト	8,000人
第4回 2010年	9月11日(土)	11:00~20:00	三洋野球場	晴れ	サンバコンテスト	10,000人
第5回 2011年	9月10日(土)	11:00~20:00	三洋野球場	晴れ	サンバコンテスト	20,000人
第6回 2012年	9月8日(土)	11:00~20:00	三洋野球場	晴れ	サンバコンテスト	35,000人
第7回 2013年	9月21日(土) 22日(日)	11:00~20:00	三洋野球場	晴れ	ブラジル音楽 ブラジルから演者を招聘	35,000人
第8回 2014年	9月13日(土)	11:00~20:00	三洋野球場	晴れ	サンバコンテスト	28,000人
第9回 2015年	9月12日(土)	11:00~20:00	三洋野球場	晴れ	サンバコンテスト	28,000人
第10回 2016年	11月6日(日)	11:00~20:00	文化むら	晴れ	サンバショー	12,000人
第11回 2017年	10月29日(日)	10:00~16:00	文化むら	雨	サンバショー インターナショナルフェスタ	2,500人

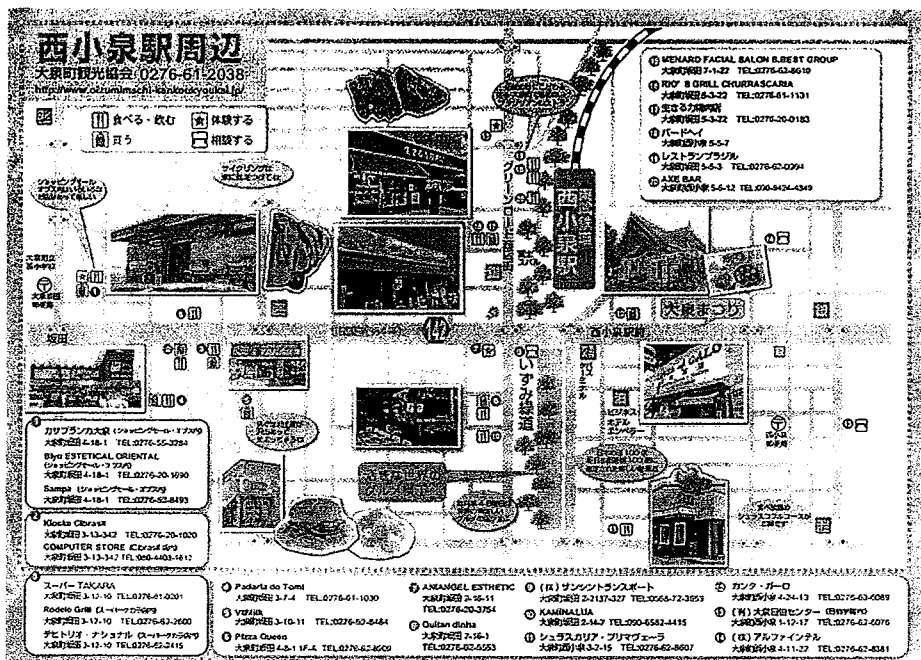
大泉町観光協会提供「大泉カルナバル実績報告」より作成

また、大泉町観光協会は、大泉カルナバルと同時期に、「ブラジルタウン」というブランドを強化する試みをもうひとつはじめています。同協会は、町内に点在するブラジルから輸入する食品や雑貨を販売するスーパーマーケットやブラジル料理レストランなどに呼び掛けて、観光マップを作成した。そして、観光マップと並行して、2009年からツアーガイド

をはじめた。ツアーガイドでは、観光客を観光マップにある店舗やブラジル人学校などの施設に案内している。ツアー中には、ガイドとしてブラジル人住民の事務局長が同行し、ポルトガル語講座なども提供している。

さらに、2010年からは「活きた世界のグルメ横丁」が開催されるようになった。活きた世界のグルメ横丁は、町内外の日本も含めたさまざまな屋台が出店するイベントで、多国籍料理を楽しめるだけでなく、多国籍ショーも売り物となっている。活きた世界のグルメ横丁は、毎月1回（年間7～11回。2018年度は8回）、大泉町の中心にあるいずみ緑道と呼ばれる野外施設で行われている。屋台では、ブラジル人住民によるブラジル料理に加え、ペルー人住民やトルコ人住民、もちろん日本人住民などによってそれぞれの国の料理が提供される。また、多国籍ショーは、ブラジル人ダンサーによるサンバショーをメインとして、ブラジル人が含まれるご当地アイドルによる歌とダンス、さらには日本人バンドの生演奏など、多彩なステージで盛り上げられている。

図表6 大泉町観光マップ（ブラジルタウンバージョン）



大泉町観光協会提供

加えて、大泉町観光協会は広報活動として都内で行われるイベントに出張して観光PRを行っている。その際にはブラジル人のサンバダンサーを同行させることもあり、「ブラジルタウン」としての魅力を発信することに尽力している。

このような大泉町観光協会が行ってきた大泉町を「ブラジルタウン」としてPRする戦略は、ある程度成功を収めた。大泉町は「ブラジルタウン」という呼称でメディアでもしばしば取り上げられている。

(5) 新たな試み

ところが、近年、町内の外国人住民の多国籍化が顕著となってきた（第2節を参照のこと）。2016年には50か国程度の外国人住民が登録されている。そのうち、とくにペルー人住民、ネパール人住民が増加傾向にある。

ペルー人住民はブラジル人住民同様、1990年から増え続け、2008年には850人になった。ただし、ブラジル人住民とは異なり、2008年以降も850人を維持し、さらに増加している。2016年にはペルー人住民は900人を超えている。

一方、ネパール人住民は、ここ近年急増している。2010年には27人であったのが、2016年には500人を超えた。

こうした新たな外国人住民の増加は、ブラジル人住民の増加時と同様に、町の景観に影響を与えている。ブラジルレストランなどが並んだ地区に、ブラジル人住民以外の外国人住民を対象とするような店舗が増加したのである。2017年1月に調査した際には、南アジア系の店舗が7件、中華系が3件、ペルー系が3件出店していた。ほとんどがレストランである。しかも、南アジア系の店舗のなかにはハラールを看板に表示する店舗もあった。さらに2018年にはその数が増えていると考えられる。

こうしたなかで、大泉町ではブラジル人住民だけでなく、さまざまな国籍の外国人住民の活動に目を向け、サポートする動きが活発化してきた。行政は、組織に改変を加えるなどして、明確に多国籍化に対応する姿勢をとるようになった。従来、外国人住民をケアする部署は、国際協働課国際協働係であったが、2018年4月から多文化協働課多文化協働係に名称が変更された。国と国の関係を示す「国際」ではなく、「多文化」という名称になったことから、町の姿勢がうかがえる。

こうした変化は大泉町観光協会の活動にも影響を与えている。

2017年の大泉カルナバルは、「インターナショナルフェスタ」と呼ばれるイベントをプログラムに組み込んで、実施された。大泉カルナバルは当然のことながらブラジル文化を前

面に押し出すイベントである。それまで大泉カルナバルでは出場グループのサンバショーを評価し、順位をつけるコンテスト、あるいはサンバショーを主体としてブラジル音楽のステージが行われていた。ところが、2017年にはインターナショナルフェスタとして、フラダンス¹²、ベリーダンス¹³、マリネラ¹⁴、ロシア舞踊¹⁵、インドネシア舞踊¹⁶、アイドルステージ¹⁷などが披露されたのである。このうち、とくに重要となるのはマリネラであろう。マリネラはペルーの伝統舞踊である。これを披露したのは、大泉町のペルー人住民が中心となるグループである。彼らは同町にダンススクールを構えている。つまり、大泉町観光協会は、ブラジル人住民以外の外国人住民の文化活動も観光事業に取り込み始めたのである。

ただし、インターナショナルフェスタには外国人住民の活動と一致しない部分もあった。フラダンスも、ロシア舞踊も、エイサーも、大泉町の大部分の外国人住民にとって伝統的な文化ではない。また、ベリーダンスやインドネシア舞踊については、基本的には日本人によるパフォーマンスであった。

それでもなお大泉町観光協会がこのような取り組みを行ったのは、事業の発展を見込んでのことであろう。

実際に、2018年に入って、6月に開催された「活きな世界のグルメ横丁」はこれまで以上に多国籍・多文化的な雰囲気があった。それはここで初めてネパール人住民による歌と舞踊が披露されたことが大きい。約20分程度のパフォーマンスであったが、多数のネパール人住民が観覧する姿が見られた。また、同日にはペルー人住民によるマリネラも披露されている。やはりマリネラが披露される時間帯には、ペルー人住民の観覧者が増えていた¹⁸。

さらに、イベントだけでなく、最近では観光マップの刷新も図っている。これまでブラジル料理レストランやブラジル青果・用品を扱うスーパーマーケットを中心として作成されていた観光マップは、インド料理レストラン、ペルー料理レストランが含まれるものに変更された。

図表7 第10回(2017年)大泉町カルナバル・プログラム

大泉カルナバル演目 (() 内は演者)	インターナショナルフェスタフェスタ演目
会場：大泉町文化むら大ホール	会場：大泉町文化むら展示ホール
12:00 オープニング	10:30 フラダンス (Mahana Dance Studio)
12:20 サンバ (G.R.E.S da Toka)	10:50 ベリーダンス (ネスマベリーダンススクール)
12:55 ボイブンバ (Orgulho de Tamazonia)	11:10 アイドルショー (CoCoRoGakuEn B.J ハート)
13:20 休憩	11:30 マリネラ (CHINO TERRONES PERU DANCE SCHOOL)
14:00 フェレーヴォ Frevo	11:50 ロシア舞踊 (マトリョーシカ)
14:35 サンバ G.R.E.S da Liberdade	12:10 インドネシア舞踊 (スカンディ)
	12:30 フラダンス (Mahana Dance Studio)
	12:50 ベリーダンス (ネスマベリーダンススクール)
	13:20 サンバ (G.R.E.S da Toka)
	13:50 マリネラ (CHINO TERRONES PERU DANCE SCHOOL)
	14:10 未定
	14:30 ロシア舞踊 (マトリョーシカ)
	14:50 インドネシア舞踊 (スカンディ)
	15:15 エイサー (和楽)
	15:45 サンバ (G.R.E.S Liberdade)

当日配布パンフレットより作成

5 大泉町観光協会の再評価—多文化共生の担い手としての役割

以上で確認してきたとおり、大泉町観光協会の活動は、「ブラジルタウン」を中心とする観光事業やそのPR活動を中心としている。したがって、本来の業務は「多文化共生」ではない。しかし、現地調査などからは、外国人住民が大泉町観光協会の観光推進事業を通じて地域社会の一員として活躍している姿がうかがえた。そこで、本節では、外国人住民の地域での活躍において大泉町観光協会果たす役割を確認したい。

大泉町観光協会が手掛けるイベントで最大のものとなるのは、大泉カルナバルである。そもそもこの大泉カルナバルの開催自体が、外国人住民を地域住民として受け入れ、主体的活動することを促していると考えられる。すでに述べたように、大泉カルナバルは「ブラジルタウン」のシンボルとなる重要なイベントである。大泉町ではブラジル人住民が増加

した1990年代に町内自治会が一堂に会する夏祭り「大泉まつり」でサンバパレードが行われていた。当時、サンバパレードは好評を博し、町外から20万人もの人が集まったと言われる。ところが、スポンサー企業の撤退などで、2001年以降大泉まつりではサンバパレードが行われなくなってしまった。その一方で、ブラジル人住民だけのイベントなどもできていったが、日本人住民も含めて行われる大きなイベントは少なくなっていた。そのなかで、大泉カルナバルは、ブラジル人住民が日本人住民の前で自己表現できる場となったといえる。大泉カルナバルには同町のブラジル人住民を中心とするサンバチームが出演している。また、ある年には地元のブラジル人学校の生徒によるパフォーマンスも行われている。つまり、大泉カルナバルでは、外国人住民をイベントに参加させるという姿勢が貫かれているのである。

しかも、大泉カルナバルの開催には、外国人住民と日本人住民の両方が協力する必要がある。大泉カルナバルは最大で35,000人を集めるイベントとなっているため、町を挙げて開催しなければならないからである。大泉町観光協会はそのなかで非常に重要な役割を果たしている。同協会は外国人住民の参加を調整するだけでなく、日本人住民との交渉までも担っている。具体的には、同協会は外国人住民のイベント参加者や町役場などと折衝しながら実施計画を作り、当日も日本人住民や外国人住民を動員してイベントを運営している。すなわち、同協会は外国人住民と協働してイベントを作り出すだけでなく、彼らが日本人住民と協働する場も提供するという役割を担っているのである。

こうした役割は、活きな世界のグルメ横丁でも確認できる。上述した通り、活きな世界のグルメ横丁ではさまざまな国籍の屋台が出店し、そのなかでやはり多国籍ステージが繰り広げられている。当然、それは大泉町観光協会が屋台やパフォーマーと交渉しながら運営されている。それだけでなく、同協会は会場と会場周辺との調整にもあたっている。たとえば、ブラジルの太鼓パフォーマンスがあった際、周辺住民から事務局へ音量の問題で連絡があり、それに対処したという事例がある。

また、大泉町観光協会は、外国人住民が地域住民としての意識を高めることにも貢献していると考えられる。外国人住民が中心となってパフォーマンスを行う各種イベントでは当然、彼らが町のシンボルとなるが、観光マップやツアーもまた重要な媒体といえる。観光マップでは、大泉町の地図の中で外国人住民の店舗を取り上げて紹介されている。したがって、そこでは外国人住民が主役となる。加えて、町内ツアーでも、外国人住民のオーナーが大泉町で主体的に活躍していることを意識できるような場面もある。ツアー中に、彼らが観光客に対して自分の経験を語る機会が設けられているのである。これらによって、外

国人住民が大泉町の一員であるという意識が高めることは想像に難くない。

さらに、近年では、大泉町観光協会は新たにやってくる外国人住民が地域社会に参加するための窓口としても機能していると考えられる。前節で確認したように、近年、大泉町観光協会はブラジル人住民以外の外国人住民に対しても、さまざまなイベントでダンスや歌を披露できるよう、積極的に声をかけている。2017年にはペルー人住民によるマリネラ、2018年にはネパール人住民に各種イベントへの参加を呼び掛け、実際に国歌や伝統舞踊が披露された。もちろん、同協会が観光推進を目的としている以上、イベントの目玉としてネパール人住民やペルー人住民に目を向けるのは当然のことかもしれない。しかし、観光振興が目的だとしても、その地域に来たばかりの外国人住民を積極的に地域社会の活動に参加させようとする動きを伴っているのは事実である。つまり、同協会の活動は、外国人住民が地域社会に参加するきっかけを作っているといえる。

以上の活動を考えると、大泉町観光協会は確かに観光振興を目的とした団体ではあるが、事実上多文化共生の担い手として重要な役割を果たしているといえる。一般的に多文化共生では外国人を地域住民として受け入れることが望まれ、それに伴いさまざまな支援を行うことが想定されている。そのため、多文化共生の担い手という場合は、国際交流団体やNPOなどの非営利的な活動、とくに「支援」に関わる団体が中心に紹介されることが多い。一方、大泉町観光協会は、いわゆる支援団体ではない。観光を推進するという目的の中で、町の経済に貢献することが求められているからである。その意味では、大泉町観光協会と外国人住民の関係はビジネスに基づいているといえる。しかしながら、以上で確認してきたように、ビジネスといえども、そこには外国人住民をパートナーとしてともに事業を進めてきたという事実がある。それは外国人住民とともに地域社会を作り出そうとするあゆみに他ならない。そういった観点からすれば、大泉町観光協会の活動は、外国人を住民として受け入れるという多文化共生の理念を具現化しているといえる。だからこそ、大泉町観光協会は多文化共生の担い手として十分に評価できるのである。

6 おわりに

大泉町では1990年代に外国人住民が急増した。それに対して行政もさまざまな施策を展開してきた。そのなかで、2000年代以降、外国人住民と協働して街づくりをおこなう機運が生れてきた。大泉町観光協会はとくに大泉町をエスニックタウン、とくに「ブラジルタウン」としてPRして、観光地化をねらった。こうした試みはある程度まで成功した。少なくとも大泉町を「ブラジルタウン」として取り上げるメディアが増えてきた。しかしながら、

近年は大泉町の外国人住民の構成が変化し、ペルー人やネパール人住民も増加し、「ブラジルタウン」と呼べない状況も生まれてきている。これに対して、大泉町観光協会も多国籍、多文化をPR活動に盛り込むようになってきている。

ところで、こうした大泉町観光協会の活動は、従来観光地化を推進するものとして評価され、同協会が多文化共生の担い手として認識されることは少なかった。しかしながら、本稿では、同協会が多文化共生の担い手としてふさわしい団体であると指摘した。すでに確認してきたように、同協会の活動が観光推進を目的としながらも、外国人を地域住民として受け入れることにつながっているからである。

謝辞

本稿の執筆にあたり、資料提供やインタビューの機会を設けてくださった大泉町観光協会副会長の小野修一氏、事務局長の中山正樹氏、事務員の富樫ジュリアナ氏、大城ダイアナ氏に深く感謝申し上げます。

[付記]

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金による研究成果の一部である。

注

¹ 上毛新聞、「大泉町の外国人 初の18パーセント越え」、2017年9月13日

² 大泉町における観光地化とその影響については、以下の論文がある。

丸山奈穂、「外国人街の観光地と民族関係：群馬県大泉町のブラジル人街を例に」、『地域政策研究』、2014年、57-68頁

丸山奈穂、「日本住民からみた外国人街の観光地化：群馬県大泉町ブラジル人タウンを例に」、『観光研究』26(2)、2015年、107-115頁

³ 注3を参照されたい。

⁴ 2008年では、外国人住民のうち、ペルー人が約12パーセント、中国人が4.5パーセントを占めた。

⁵ 大泉町におけるブラジル人住民の生活空間については、以下の論考に基づいて記述している。

荻野太一、「外国人定住化が地域社会に与えた影響—群馬県大泉町の社会構造と空間編成から—」、2009年、東京工業大学社会理工学研究科修士論文（未刊行）

齋藤俊輔、「多文化共生の担い手を育てる—群馬県大泉町での日本語教育」、小泉康一・川村千鶴子編著『多文化「共創」社会入門 移民・難民とともに暮らし、互いに学ぶ社会』、2016年、慶應義塾大学出版会、34-45頁

⁶ 情報の分野では、次のような動きがあった。2000年代までは『インターナショナル・プレス International Press』や『トゥードウ・ベン Jornal Tudo Bem』などのポルトガル語週刊新聞が発行されており、ブラジル国内のニュースだけでなく、日本におけるブラジル人コミュニティの動向などを紹介していた。これらの新聞はやがて廃刊されたが、代わって『アウテルナチヴァ alternativa』などのポルトガル語のフリーペーパーが流通するようになった。それらは求人広告を中心としながらも、国内外の動向をコラムとして掲載している。しかも、現在ではこれらのフリーペーパーはインターネットでも閲覧が可能である。

⁷ ブラジル人学校は、基本的にはブラジル教育省の認可を受け、ブラジルの正規の学校として整備されている。そのため、カリキュラムはブラジルの教育基本法に沿って作られ、教員もブラジルの教員免許を持ち、教科書もブラジルから取り寄せている。ブラジル人学校は1990年代後半から開校され、2008年のピーク時には全国で90校以上となった。その後、2009年の経済危機や2011の震災を機に急激にその数を減らしている。

⁸ 大泉町における多文化共生施策については、以下の文献を参照されたい。

糸井昌信、「大泉町の外国人市民政策」、駒井洋編著、『移民をめぐる自治体の政策と社会運動（講座 グローバル化する日本と移民問題第Ⅱ期第5巻）』、明石書店、2004年、69-94頁

加藤博恵、「地方自治体と日系ブラジル人—関東、東海、関西 [一] 外国人集住率が一五%を超える大泉町」三田千代子編著、『グローバル化のなかで生きるとは—日系ブラジル人のトランスナショナルな暮らし』、上智大学出版、2011年、67-86頁

これらの他に施策については2018年8月3日、8月9日におこなったフィールドワーク調査を基にした。

⁹ 『広報おおいずみ』vol.882、2018年6月10日、7頁

¹⁰ 前出、加藤2011によれば、職員手作りの二か国語行政情報紙『くらしの便利手帳』は日本で最初の二か国語の行政情報紙とされている。また、町の広報誌から抜粋したポルトガル語版『グラッパ』はブラジルでは手軽に手に入る「さとうきびのジュース」を意味し、情報入手の手軽さの意を込めて発行しているようである。

- ¹¹ ブラジルのカーニバルは、日本で知られるリオのカーニバルだけでなく、サンパウロやサルヴァドルなどでも催され、それぞれの地域で特色がある。また、カーニバルでは、「サンバ・スクール escola de samba」と呼ばれるサンバ・グループのダンサーや山車が都市のメインストリートを行進するというイメージがあるが、リオなどでは会場が作られ、そこで行われている。しかも、サンバパレードはいわゆるコンテストとして位置づけられており、参加するサンバ・スクールのパフォーマンスには採点が付けられる。(イシ アンジェロ、『ブラジルを知るための56章』第2版、明石書店、2010年、67-71頁)
- ¹² フラダンスはポリネシアを発祥するダンスである。大泉カルナバルでパフォーマンスを行ったのは、群馬県や栃木県で活躍する日本人講師が中心となるダンサーである。
- ¹³ ベリーダンスは中東で生まれたダンスである。こちらもまた現地の日本人ダンサーによるパフォーマンスであった。パフォーマーは、群馬県高崎市を中心として北関東で活動している。
- ¹⁴ マリネラはペルーの伝統舞踊である。男性はタキシード、女性はドレスに身を包み、踊る。大泉カルナバルでマリネラを披露したのは、地元の日系ペルー人のダンススクールである。男女、小中学生から青年までがパフォーマンスを披露した。2名による演目や、10名が参加する演目があった。
- ¹⁵ ロシア舞踊は埼玉県在住のロシア人によるダンスである。
- ¹⁶ インドネシア舞踊は日本人によるパフォーマンスであった。
- ¹⁷ Bj ハートは大泉町のご当地アイドルである。Bj ハートには日系ブラジル人を含む5人で構成されている。グループのコンセプトは共生である。B はブラジル、j は日本、そしてブリッジとジョイントの頭文字を表現している。当日は日本語のオリジナル曲を披露した。
- ¹⁸ こうした動きは大泉町の主要な祭りにも影響を与えるようになっていく。2018年7月末にはインターナショナルフェスタが大泉町の夏祭り「大泉祭り」で開催された。そこではサンバやブラジル人歌手によるパフォーマンス、それからネパール人住民による伝統舞踊、ペルー人住民によるマリネラが披露されている。実際の会場には、とくにネパール人住民が多く集まり、インターナショナルフェスタを盛り上げている様子が見受けられた。